

審査の結果の要旨

氏名 平野 利樹

論文題目 建築における「オブジェクト批判」の系譜 - 1990 年代コロンビア大学における初期ペーパーレス・スタジオの建築家を中心とした建築言説の考察

本論文は、1990 年代コロンビア大学のペーパーレス・スタジオの建築家たちの建築言説に着目し、その理論的な位置付けを「オブジェクト批判」というキーワードをもとに試みている。ペーパーレス・スタジオは、世界でもいち早くデジタル・テクノロジーを建築教育に導入した建築設計スタジオの総称である。

本論文では、デジタル・テクノロジーを導入した教育プログラムで指導をおこなったということ以外に、ひとつの傾向性を認めることが困難である、ペーパーレス・スタジオの建築家の思想や作品について、「オブジェクト批判」という見地から考察することによって、体系化を図るとともに、過去と現在の建築言説との関連性を明らかにすることを試みている。1960 年代におけるコーリン・ロウとピーター・アイゼンマンの言説を「オブジェクト批判」の萌芽と位置づけ、その思想がどのようにペーパーレス・スタジオにおいて発展し、そして現在の建築におけるオブジェクト指向存在論まで繋がっているか、「オブジェクト批判」の系譜を描き出している。

本論文は、序章、第 1 章から第 4 章の本論と、結論から構成されている。

第 1 章と第 2 章では、ペーパーレス・スタジオ以前の関連する建築言説を取り扱い、それらを整理している。この中で、コーリン・ロウと、ピーター・アイゼンマンの 1960-70 年代における言説を、建築におけるオブジェクト批判の萌芽と本論文は位置付けている。彼らの言説や作品におけるオブジェクト概念を考察するとともに、コンテクスチュアリズム、ポスト・モダニズム、そしてデコンストラクティビズムという、当時のアメリカ建築における潮流との関係性も論じている。

第 3 章では、1990 年代コロンビア大学のペーパーレス・スタジオの建築家たちの建築言説を取り扱い、それぞれの建築家におけるオブジェクト概念、そしてそれに関連した作品を考察している。これにあたって、当時の社会状況や、哲学思想分野での動き、周辺の批評家など、周辺の状況も概説している。ペーパーレス・スタジオの建築家たちの思想およびオブジェクト概念と、第 1 章と第 2 章で論じた人物や思潮との影響関係についてもここで論じられている。

第 4 章では、ペーパーレス・スタジオ以降の建築言説を取り扱っている。ここでは、第 3 章で論じたペーパーレス・スタジオの建築家たちによって発展した設計手法が、どのように現在の建築において発展・展開されたかを概説している。次に、2000 年代に入ってから社会状況の変化や、哲学思想における新しい動きについて触れ、この中でグレーム・ハーマンによるオブジェクト指向存在論について、その思想の要点が整理される。そして、2010 年代に入って活発化してきた、建築におけるオブジェクト指向存在論の議論について、ペーパーレス・スタジオの建築家たちの思想との関連を踏まえて考察している。

第 5 章では、これまでの議論をまとめるとともに、本論文の目標である、ペーパーレス・スタジオの建築家たちの言説を中心とした「オブジェクト批判」の系譜を関係ダイアグラムなども用いながら体系化をおこなっている。この中で、現在の建築におけるオブジェクト指向存在論の議論は、ペーパーレス・スタジオ以降、明確な批判対象としての役割を失い空洞化したオブジェクト概念に再び迫る試みであると位置づけられる。本章の最後では、建築におけるオブジェクト概念への再注目がもたらす可能性について、その理論的な側面や実践例を挙げながら考察している。

本論文は、現代建築の一部に芽生えつつある「オブジェクトの再評価」をめぐる言説を手掛かりに、近代後期以降の建築デザインおよびそれをめぐる言説（特にアメリカ東海岸を中心に展

開された議論)を「オブジェクトへの批判」として体系化した貴重な研究であると評価できる。日本においてあまり認知されていないペーパーレス・スタジオの建築家たちの思想と手法を体系的に紹介しているという点においても、本論文の価値を認めることができる。また、現代という、対象化が困難なものに向き合う態度は建築理論研究の学術的領域を拓くものとして共感できる。

以上のような積極的な側面にも関わらず、いくつかの問題点が存在することも審査会において指摘された。

まず第一に、本論文が鍵概念として扱う、オブジェクト概念をめぐる建築における議論の一連の流れが不明瞭であることが挙げられる。これについて、ペーパーレス・スタジオを含め、個々の建築家の単なる紹介にとどまり、時代を越えて全体の議論の流れが掴みにくいとの指摘が多く審査員から寄せられた。

第二に、本論文がおこなった建築におけるオブジェクトという概念についての考察が、今後の建築の議論や実践においてどのような貢献にもたらすかが明確ではないという指摘である。

このような指摘に対して、平野君は真摯に回答し、ダイアグラムの追加や本文の加筆修正をおこない対応した。また、挙げられた問題点も前述したような本論文の大局的な成果を損なうものではない。

よって本論文は博士(工学)の学位請求論文として合格と認められる。